

コルビュジエスタイル のイメージ

北崎妃佳里

旅の要旨

今回の研究旅行の目的は、ゼミで読んでいるル・コルビュジエの「ユルバニスム」という仏語で書かれた文献の内容をさらに自分のものにし、深めていくためである。「ユルバニスム」には、パリの都市計画についてコルビュジエの考え方が書かれているのだが、帰国して授業を受けると、パリに行く前と比べ理解度が格段に上がった。今回の旅行は研究成果だけでなく、授業促進のために大いに役立った。さらに授業が活発し、それぞれの研究にも力が入ってきた。

パリではコルビュジエの建築作品はもちろん、観光名所と呼ばれるところへも訪れた。観光名所へ行ったのは、私がフランスへ行くのが初めてだったのと、現在のパリの様子を掴みたいためでもあった。郊外のポワシーにあるサヴォワ邸、パリの住宅街にあるテルニジャン邸など、作品が存在する場所がそれぞれ郊外、都市、住宅街かで違って見え、比較できたことは大変良かった。時間が許す限りパリ中を歩き、大成功の研究旅行だったように思う。

コルビュジエスタイルのイメージ～サヴォワ邸から読み解く～

北崎妃佳里

パリ中（またはパリ郊外）の数あるル・コルビュジエの建築作品の中で私は、スイス・ブラジル学生会館、救世軍難民院、ナンジェセール・エ・コリ通りのアパート、そしてポワシーにあるサヴォワ邸へ行った。目標の建築物が近づいてくると、すぐにコルビュジエの作品だ、と一目見てわかるものばかりだった。あの直線的で幾何学的な作品は、他のどの建築家にもない特徴を持ち、異彩を放っていた。このようなすばらしい外観もさることながら、私はサヴォワ邸に行きその中へ入ったとき、外観と内装のギャップに驚いた。コルビュジエ作品のイメージは、年代によって特徴は違っているものの、直線的な建築作品ばかりという人も多いのではないだろうか。しかしながら、中に入り細部を見ていくと、コルビュジエは曲線をふんだんに利用しているのだ。そして、インテリアに至っては曲線的なものはもちろん、球体も多用されている。確かに、コルビュジエの後期作品の代表的なものの一つである「ロンシャンの礼拝堂」は、初期作品のような直線的なデザインの面影はほとんどなく、曲線的なデザインばかりを組み合わせ、生涯彼が直線的なものに傾倒していたわけではないことがわかる。それでは、外観は直線的、内装は曲線的であるこのサヴォワ邸は、コルビュジエスタイルの転換期であり彼の作品を研究していく上で最も重要なことではなかろうか。また、サヴォワ邸の内装を調査することによって、後期作品の代表である「ロンシャンの礼拝堂」の曲線に至った背景を読み解く鍵を握っているのかもしれない。これらのことから、私は今回サヴォワ邸の家具や部屋の造りなどの内装に着目して進めていくこととする。

私が最も疑問を抱いたのは、なぜサヴォワ邸の内装は曲線的なのだろうということだ。螺旋状の階段を始めとして、家具には人の身体に合わせた曲線、電球には半円のカバーがかけられ、至る所にあるスイッチは球体であった。しかしながら、直線的なものが機能的なものを作り出す一番の近道というコルビュジエの理念からすると、内装にある家具やさまざまな装備も直線を利用するのがコルビュジエの考えと相反しないのではなかろうか。また、このことから彼は内部（内装）と外部（外観）の間の関係をどのように考えていたのだろうかという疑問も起こる。そして、建築において機能性を追及したコルビュジエのスタイルがなぜ直線から曲線へと変化していったのかも合わせて、当時の社会的背景や周囲の人物が彼に与えた影響も述べて考察していくこととする。

まず、コルビュジエの制作過程を大まかに見ていこう。コルビュジエの制作過程を分けると以下の4つに分けられる。第一期は1887～1917年で、ラ・ショード・フォンにおける形成期と呼ばれる時期だ。そして第二期は1917～1931年で、サヴォワ邸などの制作にあたった白の時代と呼ばれる時期。さらに第三期は1931～1944年、第四期は1945～1965年で

ある。

また、近代建築の三大巨匠のうちの一人と呼ばれるほど建築家としては有名だが、彼は絵画にも力を入れていたことを述べておこう。彼の日常は、午前中に絵画制作、午後からは建築設計の仕事に携わることの繰り返しだったと言われるように、建築と同じくらいあるいはそれ以上、絵画に力を入れていたことが伺える。画家としてのコルビュジエは大変な評価を受けたわけではないが、建築と絵画の相互関係は影響を与えた以上のものがあった。コルビュジエはキュビズムを批判したことから、1910年代末、画家オザンファンと共にピュリズムと呼ばれる芸術運動を興し、これはキュビズムをさらに純化し、装飾性・感情性を排した表現形態を追求していくものだった。そして、彼の制作過程後期にはシュルレアリスムへの接近を見せるようになっていく。さらに彼は彫刻にも興味を示しており、1930年代に美術評論家の紹介で知り合ったブルターニュの家具職人ジョゼフ・サヴィナと共に44点の彫刻作品を残している。

ここで、コルビュジエの家具理念について述べておこう。彼は住宅を「住むための機械」と考えていたように、家具もまた「生活のための機械」と捉えていたようだ。また、彼の記述に「家具は機能的・効率的『装備』であり、『オブジェ・タイプ』でアノニマス（形動：作者不詳の、無名の）であり多様性を持ったものである」とあるように、彼の中での家具の位置づけは量産的で工業製品でなければならないとなっていたようだ。ただし、住宅にも家具にも機能性を追及したコルビュジエだが、機能性・効率性を有するのと同時に、家具には「優美さ」がなければならないと彼が考えていたことも特筆すべきであろう。実際に彼がデザインした家具には、グランドコンフォート：大いなる家具などがあるが、これらはシンプルなデザインで機能性を追及しているのと同時に、曲線を用いた「優美さ」が見て取れるのは間違いないと言える。彼のデザインした家具でもう一つ言えることは、どの家具も小ぶりなことである。それはあたかも女性向けに、または痩せ細った男性向けに造られているかのようである。女性的デザインとも言える。

さて、上記ではコルビュジエの家具理念について述べたが、コルビュジエの家具について述べる際になくしてはならない人物がいる。それはシャルロット・ペリアンだ。「ペリアンは、ジュエリーデザイナーのジャン・フーケからル・コルビュジエの本を借り、それを見たときに『目の前の壁が開いた』と述べている。そして、ル・コルビュジエのアトリエを訪ね、仕事がしたいと申し出る。ル・コルビュジエは翌日、『サロン・ドートンヌ』のペリアンの作品を見に行く。ペリアンは建築家としてではなく、家具デザインの担当として受け入れられることになった」というのが二人の出会いである。

シャルロット・ペリアンは、1920～1925年の間に国立中央装飾芸術学校でインテリアデザインを学んだ。この学校はコルビュジエの嫌う、フランスのアカデミックな装飾芸術機関である。また彼は、女性をとっても嫌っていたのではなかろうかと推測する研究者が数多くいる。それにもかかわらず、彼がペリアンを採用したのは、ペリアンならば自分のデザインを存分に引き出してくれる力がある、とペリアンの才能を認めていたことが伺える。

こうしてコルビュジェの家具は、1927年当時24歳であったペリアンがアトリエにかぐデザイン担当として採用されたことがきっかけとなり、彼の提案する「機械時代にふさわしいデザイン」がコルビュジェ、ペリアン、そしてコルビュジェの従兄弟であり建築のパートナーであるピエール・ジャンヌレの三人によって実現していったのである。

キュビズム、ピュリズム、シュルレアリスムなど世の中に興る様々な芸術運動に関心を寄せているように見えるコルビュジェだが、ここでサヴォワ邸と同時期の芸術界の動向について述べておく。20世紀に入った頃、アール・ヌーヴォー（19世紀末にヨーロッパで花開いた新しい装飾芸術の傾向のこと）が徐々に衰退し、芸術家は次々この様式を放棄し反装飾的な傾向へと向かっていった。アール・ヌーヴォーが消滅したのは、これは結局機能や機械生産に対応したデザインにはなりえず、一部の愛する者の要求に答えるだけの様式にとどまってしまったことが理由の一つとなるだろう。コルビュジェは機能性を追及しようと、初めは装飾性を排した直線的なものばかりを取り入れ、やがて装飾的な部分も取り入れ、曲線的な作品となっていったのだが、この世の中の動きはまるで彼とは反対の流れのように感じられる。以上のことから、問題提起で挙げたいいくつかの疑問についての解決の糸口が見つかるだろう。

このことからわかるのは、彼のスタイルが直線的なものから曲線的なものに変化したのは、世の中の流れに沿うことなく自分の内面世界を深化させることを常に考え続け女性性を始めとしシンボリックなものを残そうとしたコルビュジェの強い意志がサヴォワ邸から晩年にかけて直線から曲線に変化していったものと考えられる。また、サヴォワ邸の内部が曲線的であることもどこかにシンボリックなものを残そうとして意識的に曲線を多く用いたのではなかろうか。そして、直線が男性性、曲線は女性性と表わすと言われるが、この曲線の利用はペリアンという一人の女性をアトリエに参加させたことから分かるのではなかろうか。内部と外部を対照的に表現することによりシンボリックなモチーフを強調したかったのであって、直線的＝コルビュジェという私たちのイメージは私たちが勝手に考え出したもので、むしろ彼は曲線を強調したいがために、またシンボリックなものをより深めたいがために、直線を多用したのではなかろうか。

サヴォワ邸の内装の曲線はコルビュジェの何かを表わしたいと言う強い意志であって、スタイルをそのまま鵜呑みににはしてはいけないと考えるようになった。今回の調査で、直線、曲線とシンボリックなものについての関係をより深く知りたいと思うようになった。また、コルビュジェは女性を嫌っていたことを記述した資料が数多く存在するが、実はコルビュジェと女性の関係は彼を知る上で、もっと研究していくべきテーマなのではなかろうかとも考えるようになった。



参考文献

- ・「ル・コルビュジエ事典」 ジャック・リュカン監修 中央公論美術出版会 2007年
加藤邦男監訳
- ・「ル・コルビュジエ 建築とアート、その創造の軌跡」 リミックスポイント 2007年
ル・コルビュジエ作 森美術館編
- ・「ヨーロッパ美術史」 野口栄子監修 昭和堂 1997年